

経済・金融 フラッシュ

1月マネー統計 ～都銀の貸出にもそろそろ底打ちの兆し

経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

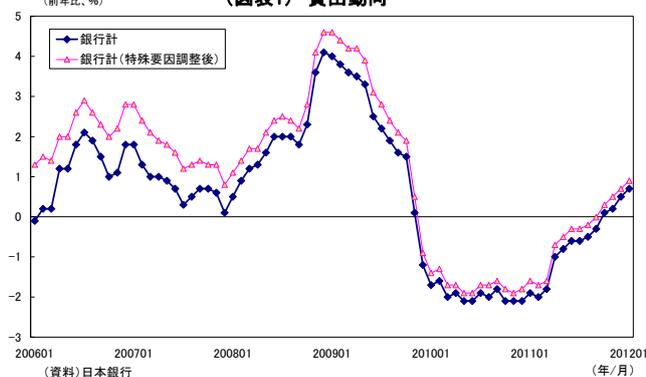
1. 貸出動向：前年比 0.7%増

日銀が発表した1月の貸出・資金吸収動向等によると、銀行総貸出(平残)の前年比伸び率は 0.7%と 4ヶ月連続の前年比プラスとなり、前月の同 0.5%と比べてさらにプラス幅が拡大している。残高で見ても、従来は比較対象である前年のハードルが下がることが伸び率に大きく貢献していたが、足元では残高自体の増勢が強まってきている。

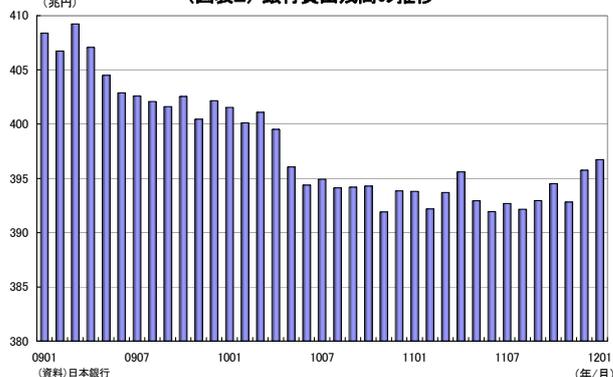
内訳では、地銀が前年比 2.1%増(前月は 2.0%増)、都銀等が同▲0.6%減(前月は▲1.0%減)。引き続き地銀がプラス幅を拡大している一方、都銀等ではマイナスが続いているが、都銀等のマイナス幅縮小の動きは月を追うごとに顕著になっており、そろそろ底打ちの兆しが見えてきた。

貸出の増勢には、社債発行が困難となっている電力会社向け増加や M&A 資金、復旧・復興に伴う被災地での資金需要などが寄与しているようだ(図表 1～5)。

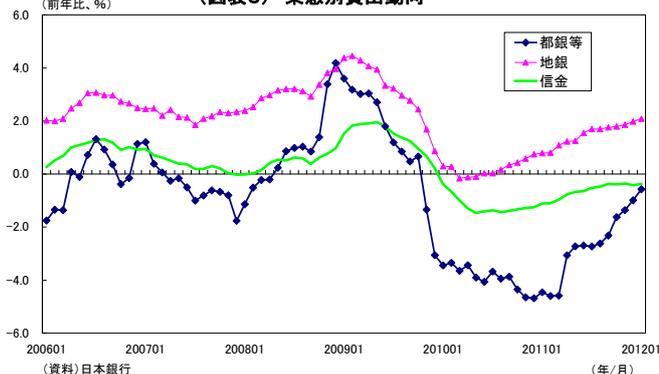
(前年比、%) (図表1) 貸出動向



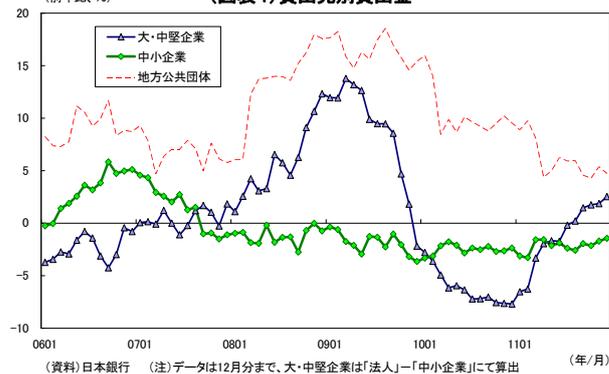
(兆円) (図表2) 銀行貸出残高の推移

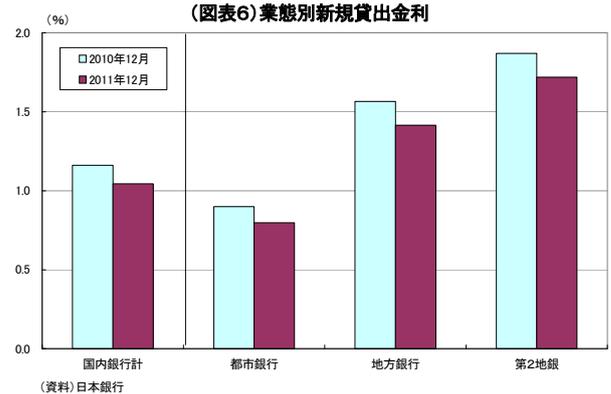
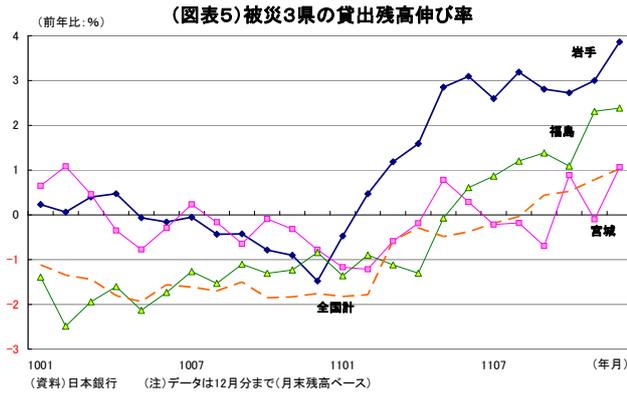


(前年比、%) (図表3) 業態別貸出動向



(前年比、%) (図表4) 貸出先別貸出金





(その他の注目点)

上記の通り、銀行貸出という量の概念では増勢が顕著になってきているが、採算性を示す貸出金利は低迷している。12月の新規貸出利回りは銀行計で1.04%と前年比▲0.12%低下(図表6)。この間、調達サイドの預金利回りは殆ど変わっていないため(もともと低下余地殆どなし)、銀行の利鞘は圧迫されている。背景には金融緩和の長期化やリスク回避に伴う長期金利の低下、競争の激化などがあると考えられる。資金需要が拡大することで需給が改善すれば貸出利回り改善にも繋がるが、現状の資金需要にはまだそこまでの力強さはないとみられる。

2. 主要銀行貸出動向アンケート調査: 銀行からみた企業の資金需要はやや減少

主要銀行貸出動向アンケート調査によれば、2011年10-12月期の銀行から見た企業の資金需要増減を示す企業向け資金需要判断D.I.は前回(7-9月期)から2ポイント悪化の▲2となった。前回調査では資金需要が一旦下げ止まった形となっていたが、今回再び減少とする先が優勢となった。

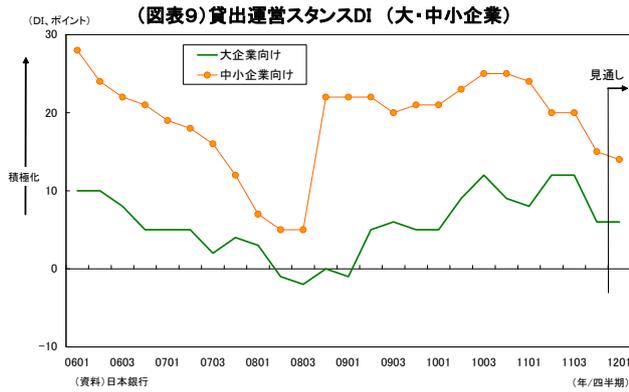
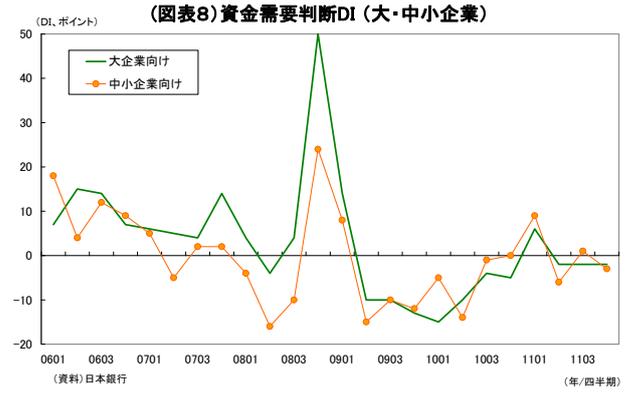
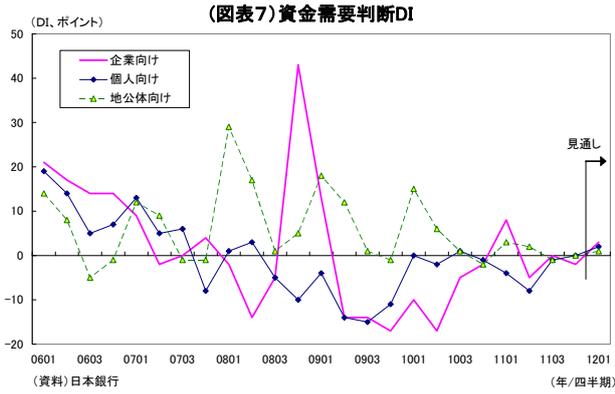
企業規模別では、大企業が前回同様の▲2、中小企業が4悪化の▲3と、中小企業の低迷が顕著になっている。減少の要因としては、企業規模を問わず「設備投資の減少」が多い。

なお、個人向け資金需要判断D.I.は0と前回から1ポイント改善。住宅ローンの改善などから、5四半期ぶりに下げ止まった形となっている。

今後3ヵ月の資金需要は企業向け・個人向けともに改善が見込まれているものの、改善幅は極めて小幅に留まる(図表7,8)。

10-12月期の銀行の貸出運営スタンス変化を示す貸出運営スタンスD.I.は、大企業向けが6、中小企業向けが15と、ともに引き続き貸出運営を積極化したという結果になった(図表9)。

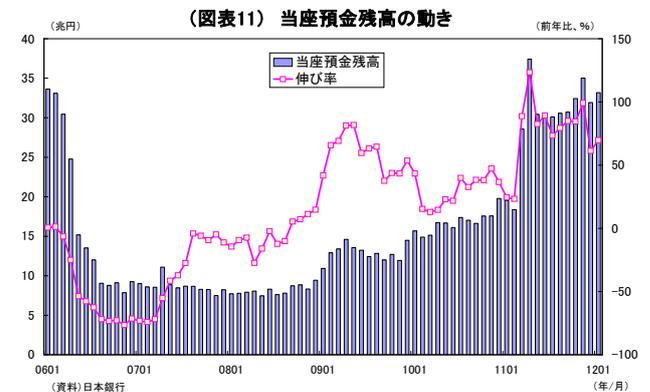
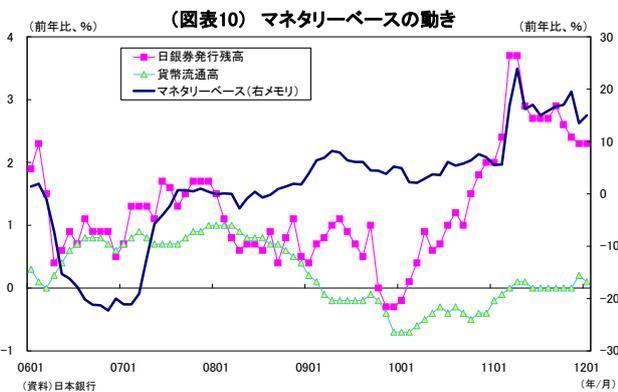
ただし、同D.I.は余程のことがない限り基本的にプラス(積極化)を示す傾向があり、むしろ前回から大企業で▲6ポイント、中小企業で▲5ポイント低下している点に銀行のやや慎重なスタンスが垣間見える。



3. マネタリーベース：過去2番目の高水準

日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示す1月のマネタリーベース(平残)伸び率は前年比15.0%と、前月の13.5%からやや拡大。残高は119.0兆円と震災直後の昨年4月以来の高水準となっている。内訳では、従来同様、日銀当座預金が前年比69.8%増と大きく寄与しているが、日銀券発行残高も同2.3%と13ヵ月連続で2%を超える伸びを記録している(図表10,11)。

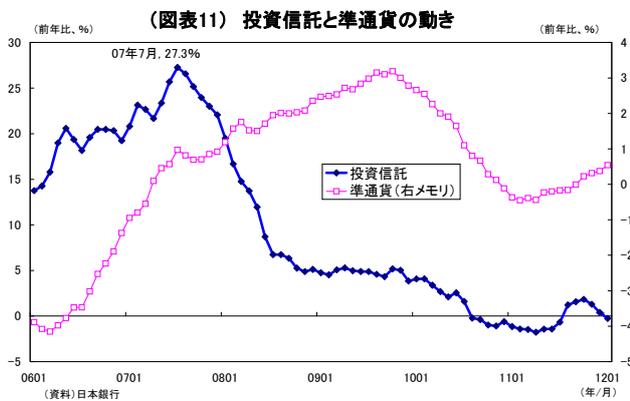
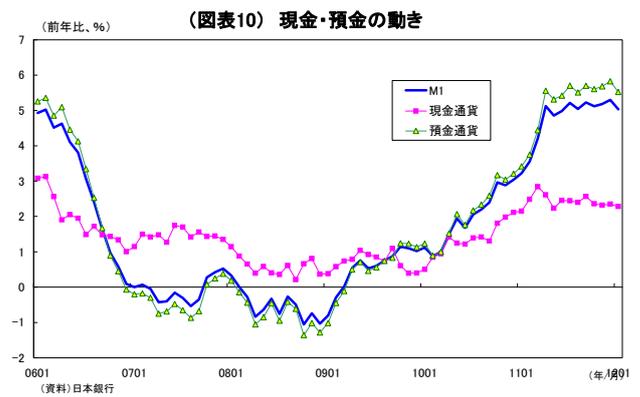
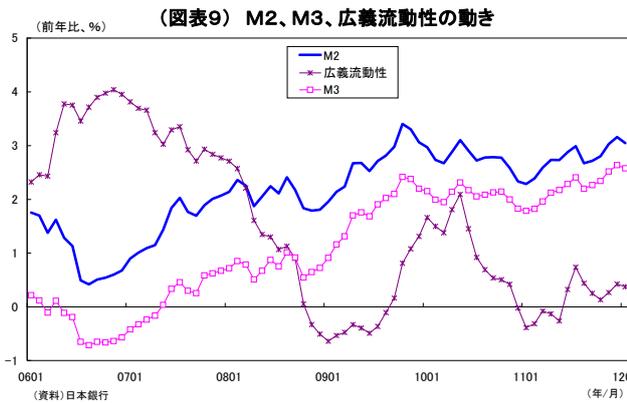
日銀当座預金残高は1月平均の33兆円に対し、足元では30兆円をかなり割り込んでいる。しかしながら、欧州情勢などに伴う景気の下振れリスクは依然大きく、多くの国々で金融緩和が進められているなか、日銀も景気の下支えと金融機能安定化に向けた高水準の資金供給を継続するだろう。



4. マネーストック：リスク回避姿勢に揺るぎなし

通貨供給量の代表的指標である1月のM2（現金、国内銀行などの預金）平均残高は前年比3.0%増（前月改定値は3.2%増）、M3（M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む）は同2.6%増（前月も2.6%増）と、統計開始以来の最高の伸びを示した前月に続き高い伸び率を維持している。一方、M3に投信や外債などを含めた広義流動性は同0.4%増（前月も0.4%増）とプラス圏ながら引き続き低迷している。

広義流動性の内訳を見ると、普通預金など預金通貨では震災後の4月以降10ヶ月連続で5%台の高い伸びが継続。一方で投資信託は勢いを無くしており、リスク回避姿勢に揺るぎはみられない（図表9～11）。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。